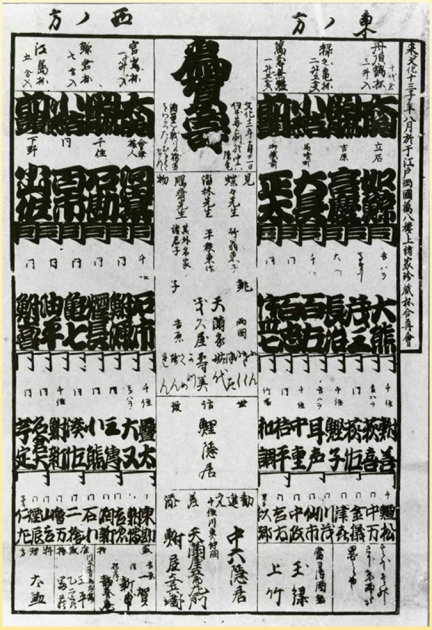
千住の酒合戦と文人たち

文化12（1815）年、江戸飛脚宿の主人中屋六右衛門の還暦を祝い、江戸と近郊から腕に覚えのある酒豪を招いて大酒戦会（飲み比べ）が行われました。「千住の酒合戦」と呼ばれたこの酒宴には、酒井抱一や谷文晁、亀田鵬斎といった名だたる文人・絵師が審査員として招かれ、その様子は後に彼ら文人と太田南畝によって『後水鳥記』としてまとめられました。

▲《後水鳥記 》江戸時代（郷土博物館蔵）



▲《酒合戦会番付 》（郷土博物館蔵）

“文人”という文化

もともとは中国で、高い教養を持ち、詩文書画に秀でた人のことを呼ぶ言葉でした。この文人の文化は、日本では特に江戸時代以降盛んになり、俳諧師、狂歌師、絵師、戯作者らが詩作や画をたのしむ文人の会合が多く形成されるようになりました。千住に住んだ建部巣兆もその代表的な一人であり、鵬斎や南畝らと親しく交流しては、時に共に句や書画を作ったのです。